

子どもの居場所としての子ども食堂の可能性と課題に関する一考察

A Study on the Possibility and Issue of Children's Cafeteria as a Children's Place

金子（旧姓・松田）悠希、陣内 雄次、上田 由美子

Yuki KANEKO (maiden name・MATSUDA)* Yuji JINNOUCHI Yumiko UEDA**

本研究は、栃木県内の子ども食堂運営者へのアンケート調査、子ども食堂での子どもの「過ごし方」調査を通じて、子ども食堂が子どもにとって居場所となっているのか、居場所となっている場合、どのような点で「居場所」になっているのかを検証した。その結果、「子どもが子ども食堂を居場所としている条件」として、1)子ども食堂の開かれ方、2)自由な時間（誰からも制約を受けない）、3)子どもが関わりに行ける「隙のある大人」の存在、4)子どもへの理解や知識のある大人の存在、5)中学生（歳の近い子ども）の存在等8つの条件が明らかになった。また、子ども食堂運営者への聞き取り調査の結果から、新型コロナウイルス感染症の災禍を乗り越え、子ども食堂が子どもの居場所足り得ているのかを検証した。

キーワード：子ども、居場所、子ども食堂、参与観察、SCAT

1. 研究の背景と目的

我が国には核家族化、格差社会などの様々な問題があり、また、子どもの自己肯定感の低さや子ども・若者の自殺の問題も深刻な状況である。

そのような中、2012年頃から東京を中心に一気に全国へと広がった「子ども食堂」は、今や地域社会における重要なインフラの一つとなっており、認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえによれば、2024年度には1万を超えた¹。また、栃木県こども（地域）食堂サポートセンターのWebサイトによれば、2025年2月時点で栃木県内では55ヵ所の子ども食堂が運営されている²。

一方、子どもに関する制度に目を転じると、2023年4月1日「こども家庭庁」が発足し、併せて「こども基本法」が施行された。「こども基本法」では年齢や制度の壁を克服した切れ目ない包括的支援を行うとしており、こどもの居場所は、こども家庭庁として新たに取り組むものとして位置づけられている。さらに同年12月には「こどもの居場所づくり指針」が策定され、「居場所づくり支援モデル事業」が新規事業として予算措置が講じられている。その中に放課後児童クラブなどとともに、こども食堂も位置づけられている。

* 保育士

** 認定NPO法人宇都宮まちづくり市民工房

栃木県においてもこうした制度を受け、前記の「栃木県こども（地域）食堂サポートセンター」が2024年度に設置されている。

このような背景のもと、本研究では、子ども食堂運営者へのアンケート調査、子ども食堂での子どもの「過ごし方」調査を通じて、子ども食堂が子どもにとって居場所となっているのか、居場所となっている場合、どのような点で「居場所」になっているのかを検証する。さらに、コロナ禍を経てもなお、子ども食堂が子どもの居場所足り得ているのか、子ども食堂への追加調査を行うこととした。

2. 先行研究のレビューと研究方法

2.1 先行研究のレビュー

(1) 子ども食堂について

先行研究では、「子ども食堂」に対する明確な定義はなく、食堂ごとに独自性が見られ、「子ども食堂」という言葉に対して人々の認識に差があることが分かっている³。また、農林水産省の報告書によると、子ども食堂の活動目的として「多様な子供たちの地域での居場所づくり」が最も意識されていることが分かっている⁴。また、吉田（2016）は、子ども食堂は「食を通じた支援」、「居場所」、「情緒的交流」の3つの機能を有するという仮説を提示している⁵。

以上より、子ども食堂が「子どもの居場所」となることが期待されていることが分かる。これに対して三宅（2016）は、子ども食堂を運営する大人の理想と子どもの置かれている現実の差が、子どもの利用を難しくしていると警鐘を鳴らしている⁶。

(2) 居場所について

山下（2013）は、「子どもがその場を自分の場所にしていくという動態的な営み」こそが、子どもにとって居場所形成の核であるとしている⁷。

また、湯浅（2017）は、居場所が子どもに提供しているモノとして、1)栄養や知識、2)体験（交流）、3)時間、4)トラブル対応（生活支援）を上げ、その中でも居場所の核となるのは3)時間であると述べている⁸。加えて、大人が子どもと関わる時間を十分に持つことで、子どもにとってその場が居場所になると指摘している。

さらに、山下（2013）は地域における子どもの居場所において重要な条件として、その「場の開かれ方（隙間）」について言及している。地域の場が子どもの居場所となるには、その場が子どもの生活圏内にあり、放課後の時間にはいつでも誰でも立ち寄ることができる場である必要があるとしている。加えて、地域の場を大人が保障する必要性と、地域の場や人と子どもの橋渡し（仲介）役となる大人の存在の重要性も述べている⁹。

七星（2019）は、これまでの「居場所」論をまとめたうえで、子どもが歩いていける距離の中に、食事の提供を通じながら個人のかけがえのなさを確認できる居場所として子ども食堂が存在していると述べている¹⁰。

2.2 研究の方法

本研究では、子ども食堂を利用する子どもの、「その場を自分の場にしていく動態的営み」を観察することで、子どもが子ども食堂を居場所としているのかを検証するため、山下（2013）の居場所に関する課題意識・研究方法を参考にしてアンケート調査、聞き取り調査、参与観察を行った。さらにコロナ禍以降の子ども食堂の状況について、宇都宮市内でコロナ禍前から子ども食堂を運営している子ども食堂の運営責任者に聞き取り調査を行った。

3. 調査・分析の結果

3.1 子ども食堂代表者アンケート調査

目的：栃木県内の子ども食堂の現状を把握するとともに、子ども食堂と地域との関りを明らかにする。

対象：栃木県内の子ども食堂（33か所）の運営代表者。

アンケート調査の形式：紙面による多項目選択式。一部記述あり。

実施期間：2018年12月12日～2019年1月末日

配布・回収方法：郵送による配布、回収

回収数・回収率：20件、60.6%

分析結果：全国と同じように、栃木県内でも子ども食堂の数が増加しており、様々な地域住民が参加しやすい工夫がされていることが分かった。

開設目的については、「子どもの貧困解消」が最も多い回答となった。また、食の提供以外の活動状況を見ると、多くの子ども食堂で子どもたちが自由に遊べる遊び場が確保されていることが分かった。ここから、子どもの様々な「過ごし方」を受容する場になっていると推察された。

食堂継続の理由、運営課題の分析結果からは、子ども食堂への参加者・協力者はあるものの、最も肝心な運営側の人員や資金が十分でないことが分かった。以上から、栃木県内の子ども食堂は、利用者から理解され需要もあるが、継続できるのか不安定な状況にあると推察された。

本アンケートの結果を参考に、「子ども食堂利用者アンケート調査」と「参与観察」を実施する子ども食堂を選定した。

3.2 先進事例聞き取り調査

目的：子どもの居場所に関する活動に関わっている3名に聞き取り調査を実施し、子ども食堂の社会的意義と可能性を見出す。

調査方法：半構造化インタビュー

分析手法：SCAT¹¹を参考に逐語録を要約

分析結果：本調査の分析より、「誰もが受容され、その活動から一切の制約を受けない事」、

表1 聞き取り調査対象者

調査対象者	概要	実施日
0さん	宇都宮市M地区で長年子どもに関わる地域活動をしている。	2019.5.15
Rさん	一般社団法人T機構に所属し、0こども食堂の代表者。	2019.5.14
Y先生	子どもの居場所についての研究者、学識経験者。福岡市内で子どもの遊び場を15年以上継続して運営している。	2019.5.20

「地域の子どもの居場所の1つである事（子どもの権利が守られる場であること）」、「地域の多世代・多様なコミュニティの場（関われる・つながる場）」の3点が子ども食堂の社会的意義として示唆された。

さらに、子ども食堂の可能性として「子ども食堂に多種多様な人やモノが集まり関り・つながることで、地域活性化につながる事」が挙げられた。

なお、本聞き取り調査の結果を参与観察の分析の参考とした。

3.3 子ども食堂利用者アンケート調査

目的: 県内2か所の子ども食堂の利用者に対して、基本属性、食堂の利用状況、利用の意識、地域への関心等について調査することで、子ども食堂がどのような役割を果たしているのかを検証する。

対象: 子ども食堂代表者アンケート調査で選定したE食堂及びO食堂の利用者（中学生以上、大人を含む）。

実施期間: 2018年7月プレ調査、2019年5月～6月：調査者が各食堂にスタッフとして参加、利用者1人ひとりの同意を得て配布しその場で回収（配布・回収数：O食堂19件、E食堂15件）

アンケート調査の形式: 紙面による多項目選択式。一部記述あり。

「子ども食堂の気に入っているところ」についての設問は、川村・谷口（2013）による居場所感因子²²を参考にした。この結果から、2つの子ども食堂の利用者は川村・谷口（2013）の居場所因子の中でも「多様性」、「リラックス感（安心感）」を重視していることが分かった。よって、2つの子ども食堂では、利用者が、安心感を持って他者と関わり合える居場所となっていることが示唆された。また、この設問について、子どもの回答のみを分析した結果、自宅から近いことが重視されていることが分かり、子ども食堂が子どもの居場所となるには、子どもが1人でも立ち寄れる場所に立地することが条件の一つであると考えられた。30～40代の女性が合わせて67%と、利用者の半数以上を占めていることが分かった。また、後述する筆者が行った参与観察でも30～40代の女性が自分の子どもを連れて子ども食堂を利用している姿が見られた。これらのことから、2つの子ども食堂は、30～40代の子育て中の母親にとって居心地のよい場になっていると推察された。

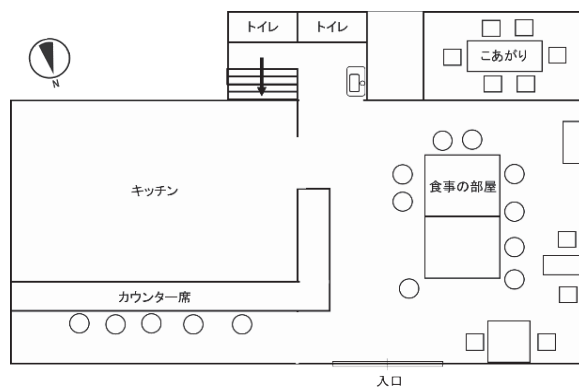


図1 E食堂1階平面

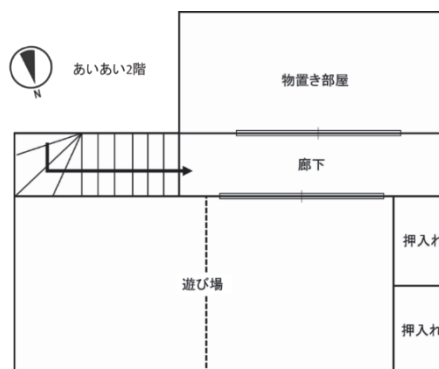


図2 E食堂2階平面



写真1 E食堂外観
(2019.11.撮影)



写真2 食事の様子／1階
(2018.11.撮影)



写真3 あそび場の様子／2階
(2019. 6. 撮影)



写真4 段ボール遊び／2階
(2019. 6. 撮影)

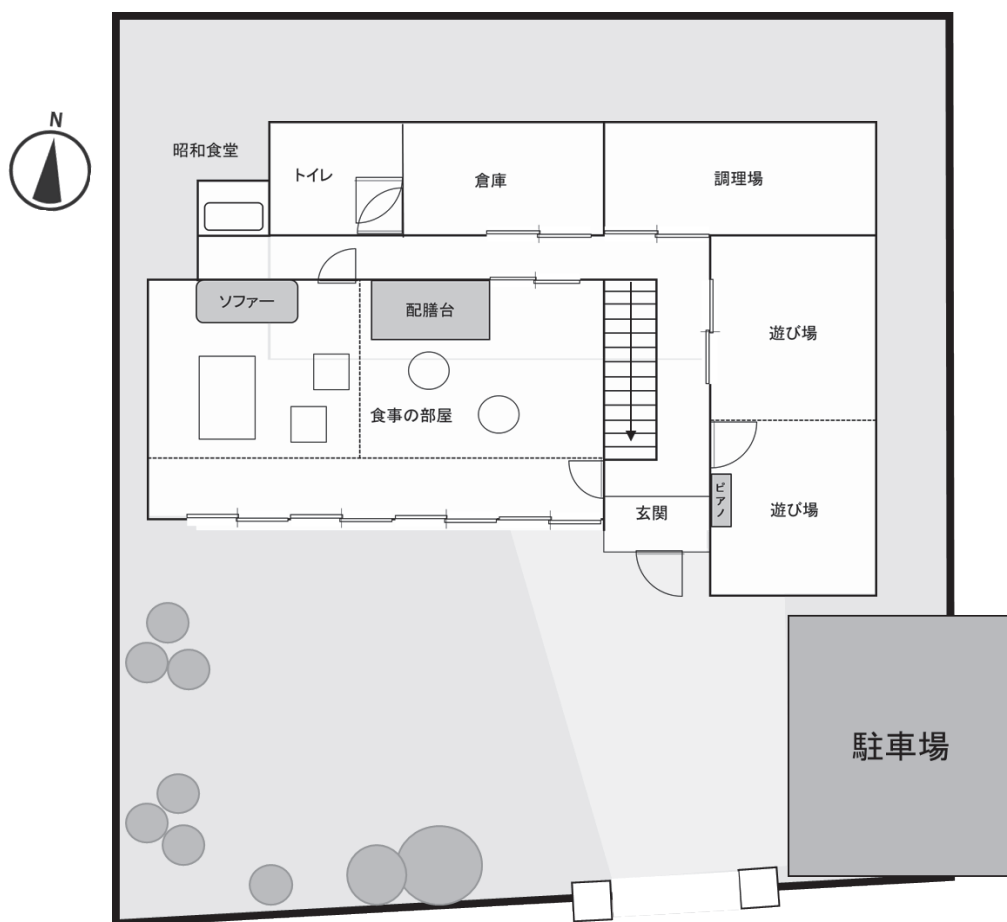


図3 O食堂平面図



写真5 O食堂外観
(2019.11.撮影)



写真6 O食堂内観
(2019.11.撮影)

3.4 子ども食堂での参与観察

目的：子ども食堂での子どもの「過ごし方」を調査することで、利用者である子どもは、子ども食堂を「居場所」としているのかを検証する。また、子どもにとって子ども食堂が「居場所」になっている場合、どのような点で居場所となっているのかを明らかにする。

調査対象地：O 食堂及びE 食堂

調査方法：調査者が各食堂にスタッフとして参加し、後日子ども達の様子（エピソード）を時系列で記録。

分析対象者：子ども食堂の利用回数が多く、特に変化や特徴がみられた4人を選定した。

分析手法：S C A Tを参考に記録を分析した。

分析結果：分析の結果、「子どもが子ども食堂を居場所としている条件」として、1)子ども食堂の開かれ方、2)自由な時間（誰からも制約を受けない）、3)子どもが関わりに行ける「隙のある大人」の存在、4)子どもへの理解や知識のある大人の存在、5)中学生（歳の近い子ども）の存在、6)子どもの意見が尊重され、その場の活動に参加できる、7)仲介者の存在、8)自分の存在や成長を認識してくれる存在という、8つの条件が明らかになった。

- ① Wordに時系列で子どもたちの過ごし方を記録し、左から「番号」、「時刻」、「子どもたちの過ごし方」の順で整える。
- ② ①のデータの中から、調査対象の子どもごとに、4人それぞれの名前が登場する記録のみを、それぞれ分けて抜き出す。
- ③ ②で抜き出したそれぞれの記録の右側のセルに、その記録内容を表す「ショートフレーズ」を記入する。
- ④ 4人それぞれで、共通分析項目である「(調査対象の子ども)からの働きかけ」と、複数の記録に付与されており、その調査対象の子どもにとって重要なショートフレーズを一つ選定し、変化や特徴をまとめる。
- ⑤ ④の分析をもとに、分析の軸①子どもの居場所、②子どもの権利、③教育学部(特に家庭科教育)の学生が関わる意義の3つの軸で記録を考察する。
- ⑥ 最後に、調査対象者4人の考察をまとめ、「子ども食堂は子どもの居場所となっているのか。また、どのような点で居場所になっているのか」を述べる。

図4 参与観察分析の流れ（1）

① 例

番号	時刻	子どもたちの過ごし方の記録
1	17:30	調査者が子ども食堂の玄関へ行くと…
2		Kは調査者を引っ張って庭に出て…

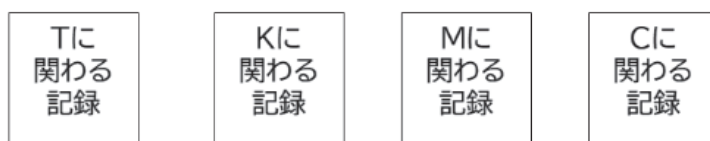
⋮

それぞれの1月～7月までの記録

O食堂
全ての
記録

E食堂
全ての
記録

②

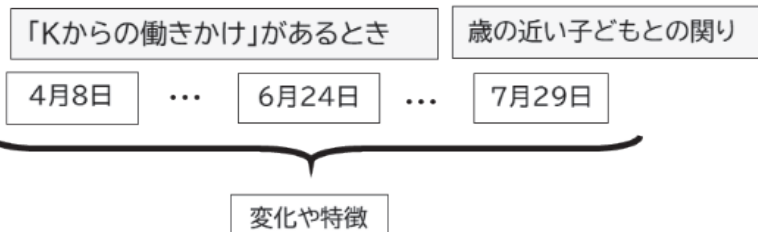


③ 例

番号	時刻	Kに関する記録	ショートフレーズ
11	18:00	KはMとご飯を…	歳の近い子どもとの関り
13		Kは調査者に話しかけ…	Kからの働きかけ

⋮

④ 例 Kの記録の分析



⑤ 例 Kの記録の分析

「Kからの働きかけ」があるとき	④での分析 子どもの変化や特徴	①子どもの居場所	⑤ 考察
		②子どもの権利条約	
		③大学生が関わる意義	
「歳の近い子どもとの関り」があるとき	④での分析 子どもの変化や特徴	①子どもの居場所	⑤ 考察
		②子どもの権利条約	
		③大学生が関わる意義	

⑥ 結論：子どもは子ども食堂を居場所としているのか。
また、どのような点で居場所となっているのか

図5 参与観察分析の流れ（2）

3.5 結 論

以上の調査の結果から、「子どもが子ども食堂を居場所にしていきやすい条件」を表2にまとめた。

表2 子どもが子ども食堂を居場所にしていきやすい条件

子ども食堂	子どもが子ども食堂を居場所にしていきやすい条件
子ども食堂 (共生食堂)	・子どもが歩いても行ける場所にある ・誰でも参加できる ・自由に遊べる環境
子ども	・自由な時間 ・大人からの制約がないこと
大人	・「隙のある」大人 ・子どもの意見を尊重する事（子どもの参画） ・子どもへの理解や知識がある事 ・子どもからの働きかけを待つこと

まず、子ども食堂（特に共生食堂³¹）、に求められる条件とは、子どもが歩いても行ける場所にある事、誰でも参加できる事、自由に遊べる環境がある事の3つである。

子どもが抱える問題は目に見えないことが多い。それは「虐待」や「いじめ」といったものだけではなく、1人で放課後を過ごす寂しさ等も含まれる。こうした、子どもの様々な問題や日々移り変わる子どもの繊細な期待を受け止めることが、上記3つの条件を満たす子ども食堂の役割である。

次に、子どもが子ども食堂で過ごす環境に求められる条件とは、子どもが子ども食堂の中で自由な時間を持てる事、大人からの制約がないことの2つである。子どもが「誰からも制約を受けない自由な時間」を持てることで、子どもたち同士や大人との関係を自発的に作り、子どもがその場を自分の場としていける。

最後に、子ども食堂を運営している大人に求められる4つの条件として、子どもと過ごす時間を十分に持ち、子どもが自発的に関わりに行ける「隙のある大人」である事、子どもの意見を尊重する事、子どもへの理解や知識がある事、子どもからの働きかけを待つ事、が明らかになった。子どもがその場を自分の場としていくには、子ども自身の働きかけが最も重要であるが、山下（2013）や湯浅（2017）が指摘しているように、大人が地域の間や人と子どもの橋渡しの役割を担う事や、子どもと関わる時間を十分に持つことも重要である。さらに、その大人が子どもへの知識や理解を持ち、子どもの意見を尊重することで、子どもがその場を自分の場（居場所）としていきやすい。

以上の条件の中でも最も重要な「子どもが子ども食堂を居場所にしていきやすい条件」は、「子ども食堂を運営する大人に必要な条件」である。子ども食堂の運営に携わる大人には、調理をする、勉強を教える等という役割だけが重要なのではなく、子どもたちが関われるような隙のある事、子どもの意見を尊重し、子どもへの知識や理解がある事が大切なのである。これら4つの条件を、子ども食堂を運営している大人が意識することで、

子どもが子ども食堂を居場所としていきやすくなると考えられる。

4. フォローアップ調査

4.1 子ども食堂関係者への聞き取り調査

新型コロナウイルス感染症を経て子ども食堂はどのような状況にあるのか、コロナ禍の後、子ども食堂が子どもの居場所足り得ているのか、について検証するため子ども食堂への調査を行うこととした。

2016年から子ども食堂を運営するとともに、栃木県内の子ども食堂の支援活動も担っており、運営側、支援側、双方の視点から子ども食堂の実態や問題を把握しているOさんへの聞き取り調査を行った（2023年5月19日実施）。

（1）聞き取り調査の概要

聞き取り調査の結果概要は以下のとおりである。

<コロナ禍を経た子ども食堂の変容、現状について>

- ・居場所の必要性はコロナ禍において高まったと感じる。
- ・家の中にいなさいと言われる中で、子ども達の誰かと話したいという気持ち、家の中にじっとしてられない、喧嘩ばかりという行き詰まりがあり、出ていける場所が必要とされていた。
- ・子ども食堂は増え続けており、以前より開設に関する相談などもしやすい環境である。また子ども食堂への理解も進み、利用者もかなり行きやすい状況になり。利用者も増えている。
- ・地域の居場所となっており、ボランティアも関わりやすく、自治体や企業も支援してくれる。
- ・子ども食堂を開設したい人はいても、その場所が無いのが最大の悩み。一方、空き家などの場所をもっている人がおり、そのマッチングが重要である。開設の相談を受けているが、マッチングはできていない。

<子どもの居場所としての子ども食堂についての評価>

- ・食事だけではなく、そこに行けば人（大人や子ども）がいることが子ども食堂の優れた点であり、それが子どもたちが子ども食堂を利用し続ける理由の一つであると考えている。
- ・子ども食堂を利用していた子どもが社会人になって、ボランティアとして関わってくれることもあるし、相談をしにくくもある。

<「子どもが子ども食堂を居場所としていきやすい条件」（前掲表2）の検証>

- ・子ども食堂の開かれ方

一般的に、子ども食堂は間口が広い、誰でも受け入れる、というスタンスである。しかし、地域の特徴なのか、初めてくる子は親に連れられてくる子ども食堂もあるし、

子どもだけで来るといふ子ども場所もある。学校帰りに立ち寄りやすいというロケーションは重要ではないか。

- ・自由な時間（誰からも制約を受けない）

自由な時間、つまり、誰も制約もしないほうが子どもの自主性が高まると感じる。しかし、自由に過ごしていても、子どもたちは誰かと話したいという気持ちを持っているようだ。一人で携帯電話みている時など、ボランティアの大学生等がのぞき込んでも拒否しないし、食事の支度をしていると（手伝うわけではないが）そこにくっついてくる。

- ・子どもが関わりに行ける「隙のある大人」の存在

大人のボランティアは、子どもと関わりを持ちたくて来てくれているので、その存在は子どもにとって大きいと思う。子どもの弾丸トークを大人はずっと聞いてくれる。子ども同士だとずっと話を聞いてもらえることはないし、保護者は忙しそうで気を遣っている。

- ・子どもへの理解や知識のある大人の存在

ボランティアの大人や大学生は、子ども食堂へ来る子ども達にはそれぞれの家庭環境があること、そして、今時の子どもたちのことを知り、日々の生活のなかで何を抱えているのかということが分かることが重要ではないか。Oさんが運営している子ども食堂には、ゼロ歳児から60歳代までおり、利用者とボランティアの境界があいまいであり、ボランティアにとっても居場所と感じてもらっている。

- ・中学生（歳の近い子ども）の存在

中学生は小学生にとっては少し「怖い」存在かもしれない。中学生や高校生にとっては、弱い存在に対する接し方を学ぶ場になっているのかもしれない。中高生が精神的に満たされていないと、年少の子ども達に優しく接することができないので、そこは大人がサポートとする。クッション役としての大学生の存在がとても重要で、大学生は本気で子ども達と遊んでくれる。

- ・子どもの意見が尊重され、その場の活動に参加できること

クリスマス会などでは子どもたちに積極的に手伝ってもらっている。自主性がある子にはどんどん新しいことをさせてあげたいし、そうしている。

- ・仲介者の存在

子どもが誰ともしゃべらないことがないように心がけており、それは独りぼっちの子どもへの配慮であるが、一人でいたい子どもはそっとしている。以上の二点については子どものことを理解している仲介者の存在が重要と言える。また、仲介者が子ども同士の喧嘩を仲裁することで、子どもがコミュニケーションの仕方を学ぶのではないだろうか。

（2）考 察

Oさんへの聞き取り調査の結果から、「子どもが子ども食堂を居場所としていきやすい条件」（前掲表2）について様々な示唆を得た。子ども食堂の開かれ方については「誰でも受け入れる」という姿勢と立地、子ども達の気持ちに寄り添った自由な時間の担保が大切であ

ることが分かった。また、子どもが関わりに行ける「隙のある大人」、子どもへの理解や知識のある大人、中学生（歳の近い子ども）や仲介者の存在が、子どもが子ども食堂を居場所としていく上で鍵を握っていると推察された。つまり、子ども食堂という空間を一人ひとりの子どもが自分なりの居場所としていくには、そこに関わるあるいは居る“人”が重要だということである。

また、今回の調査結果から、居場所としての子ども食堂の役割は新型コロナウイルス感染症の拡大前よりも高まっていると推察された。それは、コロナ禍で分断された人と人の繋がり、つまり、リアルな人の繋がり的重要性を人々が再認識し、また、コロナ禍で経済的に困窮する家庭が増加したことも一因であると考えられる。

4.2 子ども食堂や居場所関連の施策動向

前述のとおり、政府としては2023年4月1日に発足した「こども家庭庁」が中心となり、子ども食堂や居場所関連の施策に取り組んでいる。また、「こども家庭庁」発足前年の2022年度に「こどもの居場所づくりに関する検討委員会」が内閣官房に設置され、認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ（理事長）の湯浅誠が委員長となり、こどもの居場所づくりについて議論を深めたことは注目に値する。

一方、政府以外の取り組みの現状はどうであろうか。「2025年版 子ども食堂で利用できる補助金・助成金一覧」によれば、国、地方自治体、民間団体によって60程度の補助金・助成金が提供されており、おおむね全国をカバーしている（2025年2月現在）。例えば、カゴメみらいやさい財団助成金は、子ども食堂の運営費、新規開設支援の助成金であり、山形県子どもの居場所運営支援事業は、食事の提供・フードパントリーに要する食材の購入費、会場の使用料、傷害保険・ボランティア保険料、広報費の支援など、助成内容は多岐に亘っている。

以上の動向は子ども食堂、こどもの居場所の重要性が社会的に認識され、その必要性が増していることの証でもあり、子ども食堂、こどもの居場所を“特別なモノ”として扱うのではなく、社会的インフラとして持続可能なシステムを構築していくことが必要であると言える。

5. 居場所としての子ども食堂に関する考察 ―こどもの居場所としていくために―

「こどもの居場所」の本来的意義とは、山下（2013）が示した「子どもがその場を自分の場所にしていくという動態的な営み」である。こどもの居場所は大人が用意して成り立つものではない。その場に、子どもたちがどのように入り込み、その場にいる人間とどのように関係を作っていくかによって、子ども食堂がこどもの居場所になるのかが決まる。

では、子ども食堂がこどもの居場所になるとは一体どのようなことなのか。その一部をこどもの目線から導き出せたことが、本研究の成果の一つであると考ええる。

子どもそれぞれの居場所や関わる人間の選択肢が多いほど他者を頼れる機会が増え、

子どもの生活充実度が上がることが考えられるが、子ども食堂には、必ず「大人」が居る。子どもと関われる時間を十分に持ち、子どもが自発的に関わりに行ける「隙」を持ち、子どもの意見を尊重し、子どもへの理解や知識があり、子どもの働きかけを待てるような大人がいる事が、子どもが子ども食堂を居場所にしやすい条件の一つであることが明らかになった。

つまり、子ども食堂が子どもの居場所になるためには、単に複数人で食事をする活動に留まるのではなく、子ども食堂にこそ、「隙のある大人」が重要であるという事である。子ども食堂の運営に携わる大人には、調理をする、勉強を教える等という役割だけが重要なのではなく、子どもたちが関わりに行けるように隙のある事が大切なのである。

しかし、急激に増加した子ども食堂の運営者が「子ども食堂を運営する大人に必要な条件」を理解することは容易ではないと考えられる。このことに関して、子どもの居場所に携わってきた三宅（2016）が警鐘を鳴らしている¹³。様々な大人が子ども食堂を始められる事は一見良いことにも思えるが、運営する大人に、子どもへの理解や知識がなければ、子どもにとって居場所にはならない、ただの大人のエゴの押し付けになってしまう。

「子ども食堂を運営する大人に必要な条件」を子ども食堂の運営者が理解するためには、子どもの居場所の先駆者たちからの警鐘だけではなく、様々な子ども食堂や子どもの居場所の実践者同士の情報共有や、これまでの知見や経験の共有が重要であると考えられる。しかし、子ども食堂や子どもの居場所づくりの実践者の多くは、人材・資金・時間などに余裕がなく、そのような取り組みを進めるには、困難が伴うと考えられる。

そこで、行政との連携・協働が求められる。実際、内閣府や厚生労働省などの各機関によって、子ども食堂に対する資金提供や立ち上げの支援施策等が行われ、現在はこども家庭庁が中心的役割を担っている。

子ども食堂への支援を行政が行うにあたって「子ども食堂の良さを生かすこと」が大切である。子ども食堂は、来訪者の人数の多さなどの目に見える成果を上げることを目的とはしない。子ども食堂の意義は、1)誰もが受容され、その活動から一切の制約を受けない事、2)地域の子どもの居場所の一つである事（子どもの権利が守られる場であること）、3)地域の多世代・多様なコミュニティの場（関われる・つながる場）である。

つまり、子ども食堂を支援するうえで重要なことは、成果報告書を課すことでも、利用者の人数を増やす事でもなく、子ども食堂の運営者や利用者（子ども）、加えて子ども食堂がある地域の学校関係者や住民などと、行政担当者が共に支援策のあり方を検討し、「子ども食堂の良さ」を高めるような方向性を見出すことだと考える。さらに、行政担当者が利用者又は運営者として子ども食堂に参加し、子ども食堂の実態をよく理解することも重要である。

6. おわりに 一居場所づくりから共助へー

本稿は、金子（旧姓・松田）の『子どもの居場所としての子ども食堂に関する研究ー子ども食堂での参与観察からの検証を中心にー』（宇都宮大学大学院教育学研究科修士課程家政教育領域修士論文、2020年）の一部をリバイスするとともに、陣内・上田がフォローアップ調査、近年の先行研究、関連施策や動向をふまえ、全体考察を加えてとりまとめたものである。

共同執筆者である陣内は勤務していた宇都宮大学近隣の空き店舗でコミュニティカフェを10年以上にわたって運営していた。そのコミュニティカフェを使って子ども食堂（E食堂）を月1回のペースで始めたのが、当時宇都宮大学教育学部の学生であった金子（旧姓・松田）である。卒業論文、修士論文共に金子は子ども食堂に焦点を当てた。

陣内・上田はE食堂をささやかではあるがサポートしており、その経験から子ども食堂が居場所的な存在から共助へと広がっていく可能性を強く感じている。例えば、中学生や大学生、近隣の（若い男性も含めて）地域住民等が自主的に手伝っている様子や、世代を超えて利用者、スタッフみんなが交流している風景を今でも鮮明に覚えている。また、寄付（野菜、米、時には現金も）をいただくこともあった。

E食堂がなければ巡り会うことがなかったであろう人々が自然に助け合い、人と人の繋がり大切さを感じる。そのような「場」が子ども食堂であり、居場所づくりから「共助」へと広がっていく可能性を秘めていると言えよう。

湯浅誠が理事長を務めるNPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえは、全小中学校区に1つ以上の子どもの食堂がある環境づくりを目指している¹⁴。少子高齢化がこれから加速度的に進み、地域コミュニティのチカラが細っていく我が国において「共助」の維持・刷新は重要な課題であり、子ども食堂から新たな形の「共助」が創造されていくことを期待したい。

今後は子ども食堂関係者への聞き取り調査を充実させるとともに、子ども食堂や居場所づくりの施策を担当している行政関係者を対象とする調査、「共助」へと繋がっていくための方策に関する調査などが必要である。

最後に、本研究の遂行にあたりご協力いただきました皆様に感謝の意を表します。

【補 注】

- 1 認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ [4]
- 2 栃木県子ども（地域）食堂サポートセンター [2]
- 3 吉田 [11]、p.366
- 4 農林水産省資料 [7]
- 5 吉田 [11]、p.355
- 6 三宅 [8]

- 7 山下 [9]、p.51
- 8 湯浅 [10] は、子ども食堂を大きく「共生食堂」と「ケア食堂」に分類している。「共生食堂」は経済状況に関係なく子どもから大人までを含めた交流拠点機能を持ち、「ケア食堂」は貧困家庭の子どもを対象とした食事面などでのサポート機能などを備えている。pp.75 - 84
- 9 山下 [9]、p.62
- 10 七星 [3]、p.23
- 11 S C A T (Steps for Coding and Theorization) は、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、それぞれにコードを考えて付していく4ステップのコーディングと、テーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きからなる手法である。
- 12 川村・谷口 [1] は、まちなかの居場所感尺度を作成し、因子分析の結果から被受容感、自由感など12の居場所感因子を同定している。
- 13 三宅 [8]
- 14 認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ [6]

【参考文献】

- [1] 川村竜之介・谷口綾子 (2013)「まちなかの居場所が生活の質・地域への意識に与える影響に関する研究」『土木学会論文集D 3 (土木計画学)』Vol.69、No. 5、土木学会、pp.335 - 344
- [2] 「栃木県こども(地域)食堂サポートセンター」<https://www.kodomo-tochigi.info/> (最終閲覧日：2025年2月23日)
- [3] 七星純子 (2019)「2章 「こども食堂」と「居場所」論」『移動と接触 ―家族・地域・世代を超える関係形成―』千葉大学大学院人文公共学府、pp.13 - 28
- [4] 認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ「2024年度こども食堂全国箇所数調査結果を発表」<https://musubie.org/news/10825/> (最終閲覧日：2025年2月25日)
- [5] 「2025年版子ども食堂で利用できる補助金・助成金一覧」https://hojyokin-concierge.com/media/2024/08/23/kodomosyokudo_joseikin (最終閲覧日：2025年2月24日)
- [6] 「認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえHP」<https://musubie.org/kodomosyokudo/> (最終閲覧日：2025年2月21日)
- [7] 農林水産省資料「子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集 ―地域との連携で食育の環が広がっています―」<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/set00zentai.pdf> (最終閲覧日：2020年2月10日)
- [8] 三宅正太 (2016)「『子ども食堂』は、『おとな食堂』になっていないか? ―大人の理想と都合で開店して閉店! 子どもの声なき声に耳を傾けて!―」『Eduwell Journal』<https://children.publishers.fm/article/12350/> (最終閲覧日：2020年1月30日)
- [9] 山下智也 (2013)「地域における子どもの居場所の意味 ―子どもの遊び場『きんしゃいきゃんぱす』での実践的研究による一考察―」『生活体験学習研究』第13号、日本生活体験学習学会、pp.51 - 64
- [10] 湯浅誠 (2017)『「なんとかする」子どもの貧困』、(株) KADOKAWA
- [11] 吉田祐一郎 (2016)「子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた一考察 ―地域における子どもを主体とした居場所づくりに向けて―」『四天王寺大学紀要』第62号、四天王寺大学、pp.355 - 368